

日本スポーツ社会学会 第25回大会 一般公開テーマセッション

## オリンピックと社会正義

(入場無料・大会参加申込不要)

日時：2016年3月20日 10:00-12:00 (9:30開場)

会場：一橋大学国立東キャンパス東2号館2201号室

共催：日本スポーツ社会学会／一橋大学大学院社会学研究科

企画：日本スポーツ社会学会第25回大会実行委員会

### 【概要】

オリンピックは社会正義を促すか——。オリンピックは開催都市の様相を大きく変える。巨額の「経済波及効果」が謳われ、都市の開発が一気に進む。それが都市の周縁に置かれた存在を疎外し自然環境や文化を破壊したとしても、人々の悲鳴はスペクタクルな祝祭にかき消される。しかも約束された経済効果が事後にもたらされることはなく、競技場や関連インフラの建設コストの膨張による多大な負債と不採算施設の維持管理費が自治体の財政を圧迫する。こうした負の遺産への自覚から生まれた「レガシー」の言説は、むしろ開催主体に逃げ道を与え、イベントが生み出す不正義を覆い隠す。我々はこの負の連鎖から脱し、社会正義を促す装置としてオリンピックを生まれ変わらせることができるだろうか。理論と実証の両面から、この問いに迫る。

### 【タイムテーブル】

- 10:00-10:05 開会挨拶 (坂上康博 一橋大学)
- 10:05-10:15 オリンピックが開催都市にもたらすものー「祝賀資本主義」を中心に (鈴木直文 一橋大学)
- 10:15-10:35 レガシー活用の創発的過程とその成果: 長野オリンピック後18年の軌跡 (中村英仁 一橋大学)
- 10:35-10:55 ロンドン2012から東京2020へ: 政策移転とオリンピック都市における社会空間ターゲティング (Grace Gonzalez 同志社大学)
- 10:55-11:15 成熟都市への飛躍?!: 札幌における2026冬季オリンピック・パラリンピック招致活動の実際と展望 (束原文郎 札幌大学)
- 11:15-11:35 オリンピックと開発主義 (町村敬志 一橋大学)
- 11:35-12:00 パネルディスカッション (司会: 鈴木直文)

## 【報告概要】

### オリンピックが開催都市にもたらすもの

#### 「祝賀資本主義」を中心に

鈴木直文（一橋大学）

本報告は、このセッションの趣旨を明らかにするため、オリンピック開催が都市に何をもたらすのかについて、社会正義（Social Justice）の観点から概観する。Jules Boykoffの祝賀資本主義（Celebration Capitalism）の概念を紹介してオリンピックが資本蓄積の装置としての機能を肥大化してきた歴史を振り返り、経済、空間、環境、社会、文化等の諸側面において、オリンピックがもたらしてきた「不正義」を描く。最後に、将来のオリンピック開催が社会正義に貢献するための方向性について試論を提示する。

### レガシー活用の創発的過程とその成果:

#### 長野オリンピック後18年の軌跡

中村英仁（一橋大学）

スポーツ・メガイメントのレガシーに関して、これまでの議論の中心は事前にたてたレガシー計画の成否であった。しかし、事後的に、当初計画していなかった形でレガシーの活用が進み、社会によい影響がもたらされる場合があるのではないだろうか。本報告では、長野オリンピックのレガシーに関して、当初計画の遂行、計画の修正過程、およびその成果を分析する。具体的には、白馬村における外国人観光客増加の事例等をもとに、レガシーの活用がいかに当初計画しなかった形で進んだのかを紹介する。その上で、オリンピックのもたらす社会的影響、特にレガシーの活用について考察するために、事前計画の成否の議論ももちろん重要であるが、事後的な活動の議論がより積極的になされるべきだということを指摘する。

### ロンドン2012から東京2020へ：政策移転とオリンピ

#### ック都市における社会空間ターゲティング

Grace Gonzalez（同志社大学）

この報告は2012年ロンドン大会と2020年東京大会を事例に、オリンピックが都市のジェントリフィケーションと社会空間ターゲティングの装置として利用される現象を精査する。そして、都市から都市へのメガイメントに

関する政策の移転が、これらの都市に分断と唯我主義をもたらす生来的な要因であることを明らかにする。本研究成果は、2013年11月から2016年1月にかけて報告者がロンドンと東京で行った綿密な質的インタビュー調査に依拠している。

### 成熟都市への飛躍?!：札幌における2026冬季オリンピ

#### ック・パラリンピック招致活動の実際と展望

東原文郎（札幌大学）

本報告では、札幌1972の遺産や2026招致活動の推移を概観した上で、現在進行中の招致活動を市民の成熟と学びの機会とするにはどうすべきかについて展望する。まず、札幌1972の社会的インフラ整備の大きさ、スポーツ施設の使用状況、市民のウィンタースポーツの実施状況、昨今の経済状況などを俯瞰する。そこでは、成長が見込まれた1972年時点での招致が札幌の都市機能の拡充と市民の生活水準の向上にとって効果的なものであったとの推測が示される。次に、2026の招致活動について、委員会の構成、コスト計算や市民アンケート、パブコメ等の結果、招致表明のタイミング等を確認する。これらを踏まえた上で、現在と未来の札幌と市民にとって、効果を最大化する招致活動とはいかなるものかについて試論する。

### オリンピックと開発主義

町村敬志（一橋大学）

いま、世界では遅れてやってきた開発主義が猛威をふるいつつあるように見える。しかしそれは、20世紀後半に世界を席卷した開発主義とは異なる。かつて開発主義は、経済成長をめざした国家の介入であった。それは「豊かさ」の夢によって正当化され、格差是正という政策プログラムを伴っていた。そして開発主義は、その限界性ゆえにきびしい批判にさらされる。開発主義は「終わった」はずだった。だが今日、世界で叢生するメガイメントやメガプロジェクトは、私たちに新たな「開発主義」を想起させる。2020東京オリンピックもその例外ではない。いったい何が新しいのか。何が新しくないのか。また生起しつつある動きはどのような問題や課題を提起しつつあるのか。東京を事例に考えていくことにしよう。